山名家ノ紋、代々桐也、添紋七葉ノ根篠也、自鹿苑相公（足利義満）○賜篠作之御大刀、故以篠爲添紋之旨申傳候、又明德年中、山名一族之中、企叛逆、其時先祖宮内少輔（熙時）○對公方樣御味方申候、叛逆之一族之紋惑故、宮内少輔、旗之蟬（仁）結付篠葉、故其已後、以篠爲添紋、兩說申傳候、

〔寛永諸家系圖傳九十五〕小笠原

家紋、松皮、副紋、十文字、

〔鹽尻五〕堀田家平野家系圖

紀姓堀田系圖　紋は立木窠　秘紋三段頭

〔寛永諸家系圖傳十六〕酒井

家紋、丸内鳩酸醬草、裏紋、澤瀉、

〔雲萍雜志三〕予（柳澤里恭）○がいとけなき時までは、（略）中提灯に替りたる紋を云るしてともせしが、その事流布して、誰も〳〵かはり紋をつけざる者なし、

〔倭訓栞前編比二十五〕ひようもん　平家物語に狂紋と書り、大雙紙に素襖にいへり、今家紋のかへ紋を、ひようもんといふは、此義なるや、或は表紋の字にて、物につけて表する也ともいへり、されば物見に出るあまたの車をわかつに、紋をもてせるより始るともいふ、

〔秋齋閒語二〕古來通文といふ物あり、花にては唐花、葉にては此紋（杏葉）○なり、たれが著してもくるしからぬ由にて、むだ紋、たゞ紋など云是なり、

〔橘窓自語中〕紋所をつくること、もとは車の紋よりおこれりといふこと、人々さたすることなりしが、車戸記に雜色當色赤色狩襖袴、以箔摸車文押とみえ、十寸鏡に德大寺公淸、もえぎの下襲、御家の紋のもかう云々あり、參考するに車の紋よりといふこと分明なり、

〔紳書四〕一紋は蓋の紋と車の紋とが起りなるべし、巡察彈正が梶に蝶の紋つくるも車なりしな

起原